

みんなで考えよう多様な視点で取り組む

避難所運営

なぜ多様な視点で避難所運営を考えるのか？

過去の災害では、女性のほか、高齢者や障害者、外国人といった要配慮者に特有の課題が数多く報告されています。例えば、聴覚障害、発達障害などの外見ではわかりづらい障害を持つ方にサポートが行き届くまでには時間がかかる、在留外国人や外国人観光客は言葉が通じにくいルールを共有できない、などの課題がありました。これらの課題に向き合うためには、要配慮者やその支援者が体験した災害時の困りごとを学び、当事者側の視点から見た避難所を知ることが大切だと考えています。

本ワークショップでは、過去の災害で要配慮者を支援した方の体験談や避難所見学を通じて事前の心構えをし、災害時の要配慮者支援のイメージを持ちやすくすることで、避難者同士の相互扶助体制を構築することを目的としています。

過去に学ぶ

東日本大震災での障害者支援、熊本地震での外国人支援に携わった方に、体験談や工夫した点・苦慮した点についてお話を聞き、災害時のイメージを共有しました。



【障害者支援】
阿部利江氏

東北福祉大学総合福祉学部
社会福祉学科講師

東日本大震災では避難所や仮設住宅での支援活動に取り組み、被災地域に暮らす人々の生活・復興の過程を追い続けてきた。障害のある方々やその家族から被災体験を伺い、災害から命を守り、生活を続けるための福祉実践を問うなかで、「福祉」と「防災」の密接な関係を学んできた。



【外国人支援】
八木浩光氏

(一財)熊本市国際交流振興事業団
常務理事

国際交流・国際協力及び多文化共生事業を企画・実施し、熊本市の活性化と発展を推進してきた。特に、多文化共生分野に関する調査経験が豊富。熊本地震時には、外国人避難対応施設及び災害多言語支援センターを運営した。

今回学べたこと

お二人の話に共通することは、地域にどのような要配慮者が住んでいるのか、どのような文化を持っているのかを知るための、平時の「繋がり」の大切さでした。また、繋がりをつくるためのヒントとして、日頃の活動や地域のお祭り、イベントなどで、要配慮者ができそうなことをお願いしてみる、役割を担ってもらう、力を信じてみる、という、支援する側も「受援力」を持つことが大切であると教えていただきました。



避難所を知る

女性、子ども、高齢者だけでなく、障害者、外国人の視点からも避難所を見学し、当事者や自分たちが避難生活や避難所運営をする時に、どのような状況になるのかを考えました。

参加者の気づき

施設の利用計画

- 施設の基本的な利用計画（女性、子ども、障害者などが使う空間）があることに安心した。
- 学校にはスロープが少なく、上下階の移動も多いため、車椅子利用者や階段の昇降が難しい人への配慮があるとよい。
- 感染症対策用のスペースを確保することで、避難生活に使えるスペースが減少してしまうと不安。
- 屋上は、子どもの遊び場、高齢者の散歩によい。

避難所の運営ルールや配慮点

- 学校は停電時に、トイレや廊下など暗くなる場所が多いため、LEDライトなどで明かりを確保できるようにするとよい。
- 受付では、感染症対策で検温が必要なため、受付を多めに設置しないと混乱する。

トイレについて

- 多機能トイレが1階にあり、一人で移動しづらい人にも使いやすいと思う。
- トイレが不足する場合や大勢の利用者でトイレを利用する場合の衛生面に配慮したルールを相談しておいた方がよい。

大久保地区/新宿中学校



武道場



トイレ



和室



備蓄倉庫

戸塚地区/戸塚第二小学校



体育館



災害用マンホールトイレ



屋外運動場



備蓄倉庫

コラム 避難所運営ゲーム (HUG) で避難所の運営を疑似体験

避難所運営ゲーム (HUG) は、カード1枚1枚を避難者にみせて、カードに書いてある様々な事情を持った避難者を、避難所でどのように受け入れていくかを疑似体験できるカードゲームです。

本プログラムでは、基本のHUGカードに、障害者・外国人の視点や受付対応、男女共同参画のカードを追加しました。講演会や避難所見学で得た気づきも踏まえ、更衣室や障害のある方が使う部屋、避難者からのボランティア募集、イラストや色を使い分けた掲示板づくりなどが実践されていました。

協力:HUGのわ

